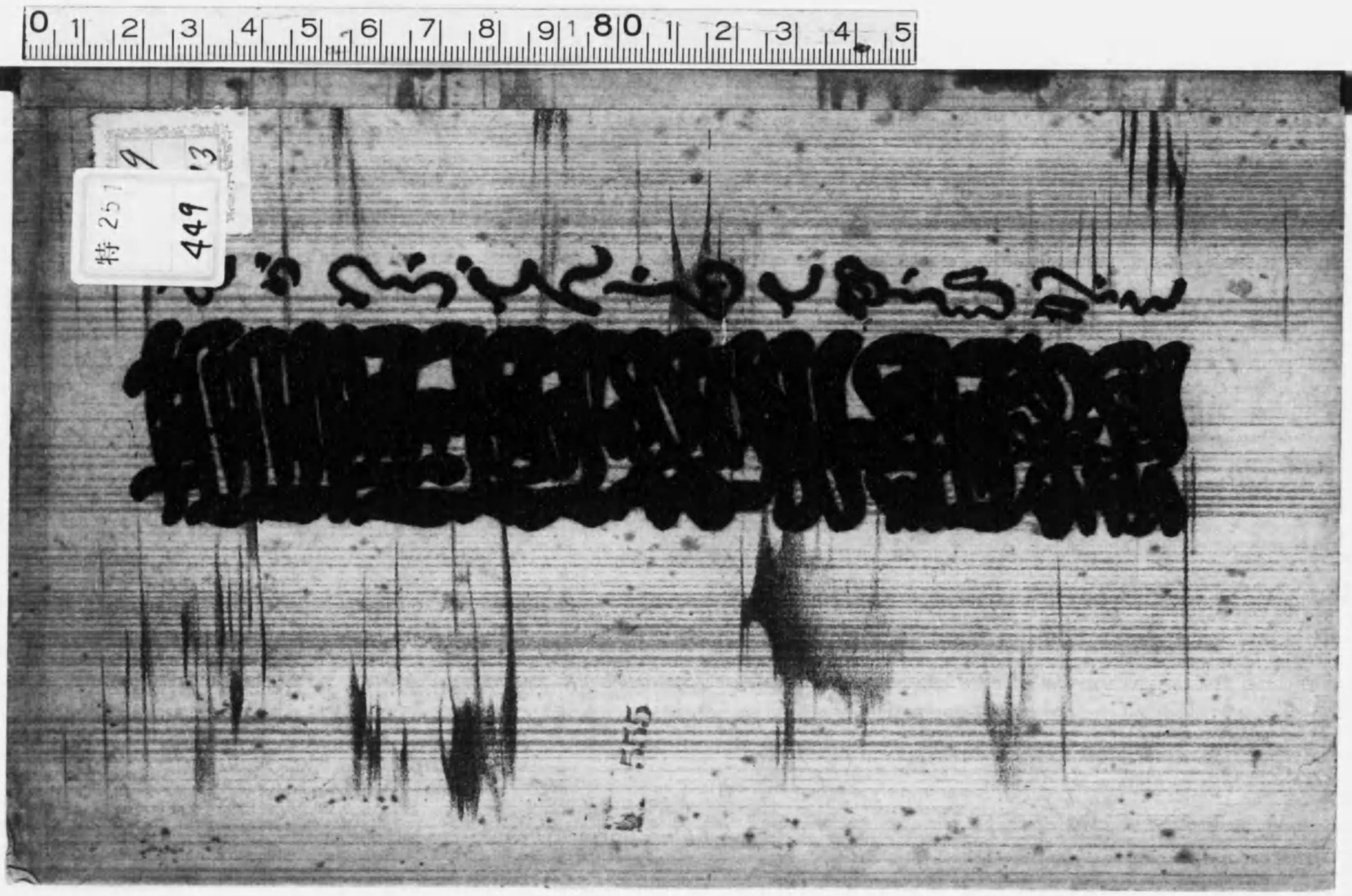

設
特 251
449 '3

特251
449

菅原傳授手習鑑

目次

松王屋舘の段……一―一八
同　註釋……一九―二一
○
菅原傳授手習鑑筋書……一一―一五
挿　繪
菅　公(扉)――筑紫に流されし菅公(口絵)――松　王　丸(カット)

菅　相　丞

解説附
稽古本 義太夫名曲全集

菅原傳授手習鑑

松王屋舗の段

三重 八重一重九重近き片邊り、新に建し一構庭の立樹もおのづから、主に連て色艶も今を榮と松王が爰に住居も奥深き、心を誰かさとるらん、同じ常盤に色かへぬ女房千代は緑子の、小

昭和四・九・廿六 帝國

太郎連てひそやかに一間の襖押明れば、御いたはしや相烝の御臺所此程より、爰に忍びも世の人を、頼む木影に雨もりて、打しほれさせ給ふにぞ、千代はこなたに手をつかへ、

『ア、嘸お氣詰りにござりませふ、御窮屈な此一間、晝は人目を存じまして、モ端近ふさへ出しませず、定めなき世と云ながら、相烝様や若君様に御引別れなされてより、北嵯峨の御隱れ家、それさへ人に洩聞へ、危ふい所を漸〳〵と、夫が是へお迎ひ申、又もや詫しい此お住居、去ながら頓て目出たふお二方に御めもじ、マア夫迄はお氣長ふ、必きな〳〵お案じなふ、時節をお待遊ばせ』と申上れば御臺所、浮む涙をとゞめ給ひ、

『ム、やさしいそなたの志、死でも忘れぬ嬉しいぞや』よしなき人の讒しらにて、さすらいと迄成給ふ、夫の行すへ我子の事、片時忘るゝ隙もなふ、あじきなき世に暫くも、惜からぬ命ながらへるも、つくしにござる我夫や菅秀才に只一目、逢て死たいなつかしい。

『此小太郎が面ざしの似たと思へば猶更に、逢たいわいの』

と斗にて託ち給へばお道理と、倶にしほるゝ袖袂、しぼり兼たる折からに、御上使の御入と呼はる聲、ハアと驚く女房御臺、倶にと胸のあたふたと、一間へ隱す間もなく、早玄關へ高桃燈、主の威光を肩できる、素袍の色の花田より、鼻高々と入來る、時

平の家來春藤玄蕃、上座へむづと押直る、斯と知らせに主の松王、病苦に惱む額際、押てしづ〳〵出向ひ、

『ヤ是は〳〵御上使と有て玄蕃殿御苦勞千萬、病中なれば略衣は御免下さるべし』

と一禮終れば、

『成程〳〵、病中なれ共時平公より仰付らるゝ、其子細といつば、先達より行衛知れざる菅秀才の有家、今日訴人の者有て、武部源藏と云ふやつ、北山芹生の里に、筆道指南に世を渡り、我子として匿ふ由、夫に付いまだ菅秀才の顏見知りし者なき故、其方に見分の役仰付らるゝ、ガいよ〳〵菅秀才に相違なくば首にして持參せよ、ア、コリヤ褒美には其方が兼て申出せし病氣保養の願、御聞屆下さるゝ、又病氣本復次第播磨の守になされふと有難い主人の嚴命、サ早く用意を致されよ』

と、いふを一間に女房が、立聞耳に打寄る夫の心白浪の、胸に漂ふ斗なり。松王はつと頭を下、

『ハヽコハ有難御意の趣、松王が家の面目ヤモ此上なし、早速承知仕るガ病中なれば萬事の手配心に任せず、シテ其源藏とやら云ふやつ、某が打手に向ふと洩聞ば、風をくらつて落やらんも斗らはれず』

『ア、イヤ〳〵其義はちつ共氣遣ひなし高が浪人の痩住居、取卷

もぎよふ〳〵しハ、、、』

『ア、イヤ　そふではござらぬ、恐れ多くも時平公の御威勢を以御詮義嚴敷菅秀才を匿ふ程の源藏、ヤモ油斷はならぬ』

『成程逃失なば我々が落度』

『左様でござる、貴殿御苦勞には候得共、願くば夜の内に、村の出口へ組子の御用意』

『いか様、拙者は是より何かの手配、然らば未明に同道致さん、萬事は明朝』

『ハ、御苦勞千萬』

と互に目禮式臺に、悠々として立歸る、跡打詠松王は、何か心に一思案、明る禊を待兼て、千代は夫の傍に寄、

『コレ　申今の上使の様子では若君様の御有家、慥に夫としれたれば討手の行ぬ其先にちつ共早ふ此内へお迎ひ申御用意を』　とせり立女房、

『ハ、、、麻に連る蓬といへど、此松王が所存の程、其方はよも知まい、北嵯峨の隱れ家より御臺を奪ひ歸りしは、菅秀才の首諸とも時平公へ御目にかけ、官位の身と成家の榮へ』

『エ、スリヤ　御臺様をお迎ひ申たは、アノ時平様へお渡申お前の心で有たか』

『ヲ、サ年月望し身の出世、今こそ運の開き時、ア、ラ嬉しや、ム、

ハ、、、、悦ばしや』

と、初めて聞たる夫の詞、餘りの事に軈れ果、はら〳〵涙落かゝる、夫の膝に膝突かけ、

『コレ松王殿、エ、お前は〳〵〳〵な、いつの間に其樣な恐しい氣にはならしやんしたぞいのふ。親御の勘當兄弟に緣切しやんしたのも、日頃からの逸徹故と諦めて、詫する時節も有ふかと、思ふ女房の心に引かへ、フ、、いかに出世がしたい迚、大恩有御臺樣や若君さまを召捕て渡さふとは、お前は鬼か蛇かいのふ、モ道に背いた天罰は、お前斗か科もない、子に報はいで何とせふ、ごふぞ心を取直し、お二方のお供して、筑紫にござる相

烝樣へ御渡し申て俱々にお力に成てたべ、拜むわいのと手を合せ、夫を思ふ眞實の涙に誠顯はせり。松王はせゝら笑ひ、

『ヤアいらざるくりごと、親兄弟の緣切ば、恩もなく、又義理もなし、日影者に涙をかけ、忰の出世を思はぬ馬鹿者、非義非道も我子の爲、子にかへる寶はないはい』

『ノウ情ない、夫程我子を思ふのは御臺樣も同じ事、人の歎きを悦んで出世した迚夫がヤア何の冥加がよからふぞ。身の行末を思はずかと諫歎ば、

『エ、又してもよまいごと、無益のくり言洩聞へ、御臺を逃さば一大事』と欠行裾をとゞめる女房。『エ、邪魔するな』と

刎退突退一間の内へ入にけり。ハァはつと斗に女房は泣も泣れぬ身のせつなさ、暫し絶入ゐたりしが、良有て顔を上げ、アヽ扨も〳〵淺間しや、年月連添夫の心、あれ程迄に悪心の有ふ様はなけれ共、我子の愛に奪はれて、恩も義理も打忘れ、鬼でもならぬ胴欲しん、こふいふ心と露しらず、おいたはしや御臺様、我〳〵夫婦を杖よ柱と思ふてござるを胴慾に、ごの顔さげて御臺様へ此世でお顔が合されふ、夫と一ツでない證據、申譯に自害して、あの世でお詫を申まする、お赦れてと身をふるはし、前後もわかず泣居たり。漸々に泣目をぬぐひ、

『ヲヽ夫よ、迚も夫の悪心は直さぬ心と知りながら何にもしらぬ小太郎まで倶に悪事を見習はせ、非業な最期をさせふより、一ツ所に連て死出三途、せめては夫を樂しみに、又一ツには小太郎が、此世になくば松王殿、心も折て本心に立歸つて下さらば、死でも嬉しう思ひます』と今死る身の覺悟にも、夫を思ふ心根の果し涙に九ツの、鐘は我子の年の數、ちゞむ斗の憂思ひ、蟲がしらすか奥の間より、

『コレかゝ様、奥にござるお客様が、呼でこいとおつしやる、早〳〵』

と餘年なき、顔見るよりも悲しさの涙呑込呑込で、

『コレ小太郎、今此母が云ふ事を、マアよふ聞や。アノ奥にご

ざる御方は、とゝ樣嚊樣の爲には、モ大事の〳〵お主樣も同然、がコレ其方をとゝ樣が殺さふと云ふ恐しい心、モウそふ成ては此母が、どふも生ては居られぬに依て、母もお供をするはいのふ、ガそなたは又とゝ樣が可愛がつてくださつたら、おとなしうして居やるかや』

と稚心を引て見る無量の思ひさとき子が、

『イヤ〳〵そんなこはいとゝ樣と居る事いや、かゝ樣が死しやるなら、わしも一所に行たいはいのふ』

『ヲヽ嬉しい事よふ云ふてたもつた〳〵のふ、モいやと云ふても夫の爲、殺さにやならぬを聞分て、死ふと云心根が、いぢらしいわいの〳〵。此子が死だと聞てなら、悪人ながらも松王殿、嘸ほいなかろ悲しかろ。斯いふ事の有ふ端か、櫻丸殿のぼだいにと拵へ置た此幡が、我子の爲に成ふとは、神ならぬ身の白幡に、印す六字の名號は、せめて此子の道しるべ、迷ぬ爲と目を閉て、用意の懐劍抜はなし、既に斯よと見へたる後に、ヤレ早まるな暫く待と一間より、御臺の御手を靜〳〵と上座へ直し手をつかへ、

『ハヽ恐ながら御臺樣初め女房にも某が心底嘸不審、今こそ明す本心を物語らん』

と威義を正し、

『扨も御家の没落より、時平公を主人とあおぐもいまはしき、暇を乞受、菅秀才の御行衛を尋奉り、再び御家を起さんと心を碎くチエ、情けなや、皆佞人に一味のやつばら、隅〳〵迄も嚴敷詮義、ガつく〳〵思ひ廻すれば、此松王斯て有ならば、お二方にもしもの時お助申さん便には、ヤ是究竟と夫よりは猶更悪事に一味と見せ、勿體なや親人に勘當請て兄弟に不和となりしは邪智深き、主人に心を赦させん爲、然るに先刻主人の嚴命、菅秀才を見分の役目を受し身の當惑、忠義一圖の源藏なればやわかむざ〳〵若君を討て渡す所存はなけれど、多勢に無勢、もし若君にあやまち有ては詮もなく、兎やせん角やと思ふ内、先程御臺のお詞に、小太郎が面ざしの我子に似たとの御歎き、シヤ是幸ひの御身代と、ヤ思へど若や女房が、愛に引れて妨なば、如何はせんと思ふより、心に思はぬ悪念も、我子の愛に引されて出世を望むと見せたるはそちが心を引見ん爲、とはしらずして一心に、我子を切て忠義を立、夫の心をなをさんとは、ハヤ適出かした女房』

と打てかはりし夫の義心、聞女房が嬉し泣、中に御臺は手を合せ忠義の爲に悪となり、たつたひとりのほんそ子を、我子の爲に身代とはあんまり冥加おそろしい、たとへ叶はぬ際迄も討手を遁れ小太郎が、命はどふぞ助てたも、頼むわいのと恩愛

の心は一ツ二道にからむ情ぞせつなけれ。松王はつとひれ伏て、

『ハヽ有難御仰せ、たとへ其場は落すとも出口〳〵は組子の大勢、遁がたなき御一命、コリヤ女房、覺悟の上は御身代のお役に立るに違背は有まい、ヤイ小太郎、我ぐわんぜなく共聞わけて若君の御爲、親の爲、一大事のことなれば、いさぎよく命を捨よ、モシ逃隱れなど致ばとゝが子でないぞよ』

と云教るも爺親の肉もとろくる不便さも、忠義の爲と喰しばる、見るに目もくれ女房も御臺も俱に聲を上、わつと斗に泣沈心を思ひやられたり。

『ヤア未練至極、稚けれ共健氣の覺悟、よしなき歎に隙入て時刻移れば詮もなし、ハア最早夜明に間もなし、某が出仕迄に寺入の用意せよ、サ早く〳〵』

『アイ』

あいとは云へど今更に心の張の弦切て、力なく〳〵立上れば、

『コレかゝ樣、そんならもふ行のかや、とゝ樣譽て下されや』

と稚心の立派さを思ひやつたる爺親の顏を背けて皺面も忠義の爲と諦めて、取出す小袖もかゝる身に、なると白地を染上し、齡を祝ふ群づるも、今ははかなき夜るの鶴、泣音立じと女

房も御臺も倶に目に餘る、六筋の涙明六ツの、鷄は憎しと詠給ふ、それは出船の御名殘、是は弘誓の船さして、あの世へ急ぐ愛別の子の死顏に逢に行、空定なき一雫、枝にもらさぬ涙の雨や、一葉別れて又一葉、緣を殘す影向の松に哀をとゞむらん。

松王屋舗の段註釋

〔九重〕　天子の御所。宮城。古、支那の王城は門を九重に造る制度でありましたので、王城のことを九重とも九門とも云つたので宮城又は天子の御所のことを八重といふのである。門を九重に造るのは九天に象つたのである。九天とは支那の天文學で九つの方角に天を分つたのをいふ、卽ち中央を鈞天といひ、東を蒼天、西を旱天、南を炎天、北を玄天、東北を變天、西北を幽天、西南を朱天、東南を陽天と云ふのである。

〔緣子〕　幼子。草木の葉の水々しいのに譬へていふ。

〔御臺所〕　貴人の內室を尊稱した言葉。臺所とは臺盤所の略。臺盤を藏つて置く場所。後世武家にては食事を調達する室を臺所といふやうになつたのも其の意味からである。また食物を調理するのは婦人の勤であるから御臺所といふ名が起つたのです。臺の御方ともいふ。

〔よしなき人〕　思ひがけない人。時平のことをいふ。

〔さすらひ〕　漂泊。それから其れとまごつき歩くこと。

〔面ざし〕　目鼻立。顔付。

〔高桃燈〕　高張提灯

〔花田〕　縹色。薄き葉色。濃き容色。はないろ。淺葱。露草の花で染るゆへ露草色ともいふ。

〔時平〕　左大臣藤原ノ時平。しへいと讀みます。

〔式台〕　禮義。挨拶。式退、式體、色體とも書く。武家時代の言葉。式は法退はしりぞくといふ意味で、禮法を正し、辭退して人を先に立て、己は後へ退くことを云ふ。

〔麻に連る蓬〕　麻の中の蓬。「荀子」の勸學篇に「蓬、麻の中に生ず、扶けずして直し」といふ詞があります。葉の曲りくねる蓬も眞直に生ひ立つ麻の中に育てば倶に眞直になるやうなもので、人も善人と交ればその感化によつておのづから善良な人になるものである。

〔餘年なき〕　餘念なきの誤り。

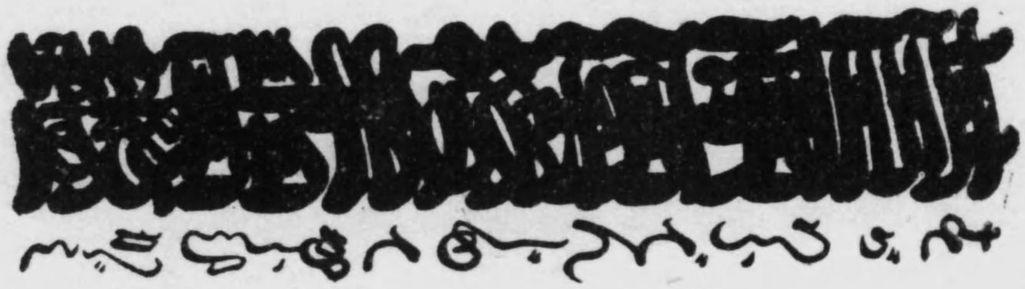
〔やわか〕　何うしても。何うしたつて。何んな事が有つても。何としても。

〔ほんそ子〕　大切な兒。

〔群づる〕　鶴の澤山飛んでゐる衣服の模樣、多くは祝ひ着の晴に用ふ。

〔弘誓の船〕　ぐぜいの船と讀む。佛、菩薩の衆生を濟度するのを、船が人を乘せて渡すのに譬へていふ語。誓ひの船。

〔明六つ〕　曉の六つ時。卯の刻。今の午前六時。



解説附
稽古本

義太夫名曲全集

菅原傳授手習鑑

解題

時平の讒言によつて菅原の道眞は筑紫へ左遷せられたが、御臺と一子菅秀才と、菅秀才の姉苅屋姫とは潛かに遁れて、苅屋姫は菅公の伯母覺壽の下に、菅秀才は書道の弟子武部源藏の子として、また御臺は舍人松王丸の家に匿まはれてゐたのを時平は到頭嗅付けて先づ菅秀才を亡き者にしようとしたけれど、幸ひにも松王夫婦と源藏夫婦の忠義によつて難を免れた後、時平公は雷火に打れて死し、菅家の寃も晴れて再び父の位を繼ぐことになつた。

この淨瑠璃は梅王、松王、櫻丸といふ三ツ子の兄弟と書道の奥儀を授けられた武部源藏とが主人役を勤めて

ゐる。何れも日本特有の明代精神であつた主從の觀念を骨子としたものであるが、菅公はまた書道の神として崇められてゐるのと、もう一つは此の淨瑠璃の焦點は「寺見屋」の場であるので、「菅原傳授手習鑑」といふ外題を飾つたものであらふ。

作者は竹田出雲、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲である。

菅公左遷

菅原道眞公は延喜の帝に仕へて、官、右大臣にまで昇り、天晴れ天下の名相として、時の左大臣藤原の時平と肩を列べた人で、文學に達し、筆道の奥儀を極め、才學智德兼備はり、帝の御信任も殊の外厚うございましたが、月に村雲花に風とやらで、終には人の妬みを受けまして謀叛の罪に陷されまして筑紫へ流される事になりましたが、後には天滿宮として神に崇められた程の偉い人ではあれど、何處から何ういふ禍ひが降つて來るか分らないもので、渤海國から日本へ來朝しました唐土の坊さんで天蘭敬と申しますのは其頃日本にも名を知られた名僧でありますが、我が延喜の帝は當代無二の聖天子として唐土にもお名が響き渡りましたので、徽宗皇帝は彼の天蘭敬を使として日本へお遣はしになりまして、帝の畫像を寫させ、親しく交はり給ふ心組にて、朝夕それを拜したいと云ふ思召でございますので、おん弟宮の齋世親王を御名代として帝の衣冠束帶を着けさせましたので、使僧天蘭敬は筆を執つてサラ〳〵と寫し取りまして、恭しく龍顏を拜しまして、いかにも古今の聖天子に坐しますと敬ひ奉つて退出いたしました。

すると、今まで威儀を作つてお傍に控へてゐた藤原の時平は、突然立ち上つて齋世親王を驚獨にして、冠も裝束も引ッ剝いでしまひましたので、一同は呆氣に取られて居りますと、道眞公は靜かにこれを止めまして、

『何ういふ譯でそんな無法なことを爲さるのか』と申しますと、

『いや、御名代の役が濟めば只の親王であるから、天子の衣冠束帶はもう一時も着せて置くこ

とは出來ぬ。そこで此の御衣は一先づ時平が預かる」

と申しますので、『それはまた何といふ無茶な事であらふ。畏れ多くも袞龍の御衣を私に預かり置くなどとは以ての外である。もしや謀叛の下心ありなどと疑ひを受けてはお爲になりますまい』と云はれて、時平は胸に釘を刺されましたと云ふは、もと〳〵反逆の萠しが有つたのでかう云はれると内心狼たへない譯に行きませんから、少々まごつきまして、目を白ッ黒して默りこくつて了ひました。然し、斯ういふ事からして時平の憎しみはだん〳〵と菅公の身に振り懸つて來るのでした。

その内にまた思ひがけない事が降つて湧きました。それは菅公の息女苅屋姫と弟宮の齋世親王とが手に手を携つて都を落ちましたが、さア何處を何う搜しても行方が知れないと云ふので御臺を始め菅家の人達は大層案じまして心當りへ手を配りましたけれど、道眞公には未だ其事は申上げませんでした、と云ふのは、勅諚によつて書道の奥儀を傳へるため七日の間潔齋して何人にも會ひませんので、御臺も苅屋姫の事を申上げる暇が無かつたのです。

道眞公は書道の奥儀を傳へるには、もと自分の家に仕へて居つた者に武部源藏定胤といふのが有つて、心も潔白であり、手筋が非常に好いので、是非この者に傳へたいと思召して、舍人の梅王丸に云付けて源藏の所在を搜させましたが、漸うのことで行方が知れましたので、梅王は早速源藏夫婦を連れてまゐりました。

源藏は勘當の身の上ですから恐る〳〵御臺樣のお目通りへ出ますと、何の用が有つてお召出しになつたかは御自身でも御承知がないのですが、お氣に入りの源藏夫婦が思ひがけず遣つてまゐりましたので、大層お喜びでございましたから、源藏も女房戸浪も嬉し涙を溢しました。

源藏がまゐつた由、大臣まで申次ぎますと、直ぐにこれへ呼べと仰せられますので、小さくなりまして御前へ出ますと、勘當されてから丁度四年越お目通りをしなかつたお氣に入りの家來のことですから、道眞公も内心喜ばれましたが、何しろ物忌み中のことで餘事は仰せられま

——太宰府に流された後の寂しい面影——

せんで、勅諚の趣きを申聞けまして、麿の目の前にて書を試みよと仰せられましたから、謹んでお承けをしまして、一生一度の精根を盡して源藏は筆を振ひました處、いかにも筆道の妙を得て、塵一點の曇りもございませんので、盡く感服遊ばされて、神道秘文の傳授の一卷を源藏に授けましたので夢かとばかり喜びましたけれど、勘當は免されませんで、最早用はないで忽々に罷り出よとあつて追立てられましたから、仕方はございません、源藏夫婦は涙ながらに館を立去りました。

丁度其時、朝廷から俄のお召でございまして、まだ七日の日限に滿たないのに何うした事かと怪みながら、館を出る時に冠が落ちましたので、是は何か變つた事が有るのでは無いかと案じて居りますと、果せるかな大事出來に及びまして、菅公は謀叛の罪に問はれて、筑紫へ流されることに成りましたが、先づ暫くの間は閉門といふお沙汰でございます。

その警固の役に當つた三善の清行は時平公の加擔人でありますから道眞公には辛く中りまし

て、散々な目に會はせた上に、家來の荒島主税に云付けて割れ竹で打たふとしましたので、舍人梅王丸は腹を立てゝ其奴を摑み殺さふとしましたので主人に叱られます。それで清行の家來どもゝ梅王の勇氣に恐れて一人も手を出す者が有りませんでした。

そも〳〵菅公のやうな道德堅固な人が何ういふ譯で謀叛の罪に陷ちたのかと申しますと、齋世親王を天子の位に卽かせ、息女苅屋姫を皇后に直して、己れ外戚の權を恣まゝに爲んとする下心ありとの嫌疑でございました。然しその起りを訊して見れば、齋世親王と苅屋姫とが好い交情になつたのも、親王の舍人を勤めてゐる櫻丸が手引をしたので、かういふ事變が持上つたのであると云ふので、申譯がありませんから、父親白太夫の七十の賀の祝ひに櫻丸は父の家へ來て腹を切つてしまひました。

それは後の話で、菅公が閉門になつた其日、源藏夫婦はコッソリ　忍んで來まして、梅王と謀し合はせて、菅秀才を盜み出して、それなり行方を晦まして了ひました。

やがて菅公は攝津の安井といふ處から船出をして、遙々と筑紫へ流罪となりました。御臺樣は何時、何處へ何う行かれたか皆目お行方が知れませんでしたが、それは知れない譯です。時平公の舍人松王丸が人知れずお匿ひ申したのですから、ちよつと知れる筈は有りません。

松王丸

菅原傳授手習鑑

松王丸は菅公の御傾分である佐太村の百姓四郎九郎の伜でありますが、梅王丸、松王丸、櫻丸と兄弟揃つた三ッ子でございます。三ッ子は天下泰平の相、舍人にすれば天子の守護となる故、成人さして牛飼に差上げよといふ菅相丞樣のお執成で、四郎九郎には白太夫といふ名前を付けて、お扶持まで下さる事になりまして、梅王は道眞公に仕へ、松王は時平公に仕へ、櫻

丸は齋世親王に仕へて居りました。

三ッ子は顔も似てゐるやうに心も似てゐる筈ですが、何ういふものか此の三人の兄弟は顔も氣質も銘々異つてゐました。梅王はやゝ分別臭く、何處か理屈ッぽい男でした。それに引換へ櫻丸は氣だても柔しくて、眉目容さへ女のやうでした。獨り松王だけは何うも稜が有つて根性曲りのやうな、至つて人好きのしない生れでした。それに主人時平は菅公にも敵であり、齋世親王にも敵である處からして、一層仲が惡くなり、到頭大喧嘩を仕出かしまして、父親の賀の祝ひの日に自分から勘當を願ひ出て、今では親でも子でもない赤の他人になつて居りますが、實は親不孝でもなく不忠の臣でもありません、イヤ〳〵親不孝どころか眞心の厚い點に於ては他の二人の兄弟にも優ればとて劣るやうな人では有りません。自分達親子には大恩のある菅公のお身に就ても內々苦勞を致しまして、何うにかして力になつて上げたいと思ひまして、自分が時平の舍人であるのを幸ひに、何處を何うしたものか御臺樣を密ッと引取りまして、奥の一間へ隱して置いたのは好いが、こゝにまた思ひがけない難問題が突發いたしました。それは外でも有りません、菅公が左遷になると同時に行方不明であつた菅秀才の所在が知れたので、早速討手を向ける事になりましたが、さて困つた事には菅秀才の顔を見知つた者がございませんので、そこで松王丸に首實驗を申付けることになりました。

ちやうど松王丸は身體が惡くて引籠つて居りましたが、そこへ春藤玄蕃といふ時平の家來が使にまゐりまして、菅秀才は武部源藏といふ奴が連れ出して、自分の子に仕立てゝ、芹生といふ所で手習師匠をしてゐる由、訴人あつて相分つた故、そこ許に檢分の役を仰せ付けられたから、病中大儀では有らふが身共と同道してくれと申しますので、ハッと驚きましたけれど、顔にも出しませんで、それはお安いことである、早速お伴いたしませうと請合ひましたので、玄蕃は滿足しまして、その骨折の報ひには豫て願ひ出た通り病氣保養の件はお聽屆けになるであらふ、ゆる〳〵手當をしたが宜しい、また追て播磨ノ守に任官せられるであらふと申しますの

で、松王は有難くお禮を申上げました。

『併し、その源藏とかいふ奴、菅秀才を匿まひ置くほどの曲者であれば、いつ風を喰つて逃げまいものでもない、そのお手當が肝腎でござる』

と申しますと、玄蕃はせゝら笑つて、『ナァニ、高の知れた痩浪人、手當も何も要るものでない、直ぐに踏込んで捕ッつらまへる分のことだ』

といふ。

『イヤ左樣でない、萬々一といふ事もござる、些かの油斷の爲に偶ッと取逃しでもしては其れこそ大變だ、先づ何事も用心に若くはないで、塵一點越度のないやうに手配りをなされたが宜しからふ』

と申しましたので、玄蕃も成程と思ひ、それでは村の出口〳〵を殘らず塞いでしまひ、その上、家の周圍はグルリと取卷いて、蟻一匹匍出る隙のないやうに爲よう、では早速支度に取掛つて明早天に乘込むことにしようと、固く約束して別れました。

始終の樣子を立聽してゐた女房千代は、餘り意外なので呆氣に取られまして、夫の側に詰寄りまして、今仰しやつた事は眞實ですかと尋ねますと、松王は然も嬉しさうな顏をして、『出世をする時が來たのだ』と云つて喜びますから、千代は愈々驚きまして、そんな事をして出世をしたッて末始終好い報ひの來るものでは有りません、良人は其れで可いとしても子供が憫然です。何うぞ思ひ返すやうにと云つて泣いて縋りましたけれど、てんで耳に入れませんで、蹶飛すやうにして奥へ行つてしまひました。

千代はつく〳〵考へました、これと云ふも詰りは子供に出世をさせたいからの惡心であらふと思ふ、子供が無ければ其れ程の惡心も起るまひから、こゝは思ひ切つて子供を刺殺して自分も一緒に命を捨てよう、さうして御臺樣への申譯を立てねば成らないと決心しまして、今年九歲になる小太郎といふ子を呼びまして、事情を分りよく咄しますと、わしは母樣と一緒に死に

ませうと申しますので、千代はその健気な心に泣かされました。

そこへ松王丸は御臺様の手を引いて出てまゐりまして、實は斯う〳〵いふ譯であると本心を打明けましたので、千代はホッと吐息を吐いて胸を撫で下しました。が、若君菅秀才のお身の上は何うなるでせう。

松王は我が子小太郎の面差が菅秀才に似て居りますので、お身替りに立てようと云ふのです。さうするには小太郎を芹生の里へやつて、源藏の許へ寺入をさせて、それとなく源藏の手で打つて貰はねばなりませんから中々むづかしい仕事なのです。只だ都合の好い事には、源藏夫婦は千代の顔を知つて居りませんから、明朝早めに連れて行つて弟子入を爲せようと云ふのです。さうすれば忠義一途の源藏の事ですから、默つて此子を身替りに立てるに違ひないと思ふのです。よもや菅秀才を手にかける氣遣ひは無からふと思ひます。

小太郎は發明な子供ですから、能く親のいふことを聞分けまして、何も彼も承知の上で、母親に連れられて、芹生の里へ行くことになりました。そこは未だ頑是ない子供のことで、父親に褒められるのが何より嬉しいのでした。

御臺様はそれを不憫がりまして、涙に掻きくれました。ましてや兩親の悲しさは怎麼でありませう。

此次が「寺子屋」の段になるのですから、いづれ卷を逐つて詳しいお話をする事に致しませう。（をはり）

319
513

昭和四年三月二十五日印刷
昭和四年三月二十八日發行

菅原傳授手習鑑解說

編者　玉井清文堂編輯部

東京市神田區表神保町十番地
發行者
兼印刷者　玉井清五郎

不許
複製

發行所　東京市神田區表神保町一〇
電話神田二三三三番
振替東京三二八番
玉井清文堂

【清文堂印刷部印行】

終